

Fate/DB Order

ますたー☆あじあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※不定期更新です。

マスターにならざるを得なかった藤丸立香とデミ・サーヴァントであり、ある程度戦えるマッシュ・キリエライト。我々カルデアの目的は人理焼却を阻止するために聖杯を回収すること。初めての召喚、英雄を呼び出すはずがシステムのエラーかそれとも何者かの仕業か、英霊ではない人が呼び出される。ハチャメチャで制御不能の限界バトルが幕を開ける…？

目次

プログラグ

1

プロローグ

「とりあえずサーヴァントを呼べる状態を確保しました」

彼女の名前はマシユ・キリエライト。見た目は普通の女の子だがデミ・サーヴァントとという状態で普通の人ではないらしい。自己紹介が遅れてしまった、俺は藤丸立香なんだ。そう、こうなる前までは。

『藤丸君、今からサーヴァントの召喚を行う。君は何もする必要はないけど出てきた英霊と協力する必要がある。君の腕にある令呪はその英霊のセーフティ、安全装置にもなるんだ』

通信越しに俺に話しかけるのはロマニ、通称ドクターと呼ばれている。

「はあ…本当に大丈夫なんでしょうね？」

溜息をつきながら俺を指さすのがカルデアの所長、オルガマリー・アニムスファイア。って俺信用なさ過ぎじゃないですかね?! いやたしかについさつきまでただの青年で魔力も全然でしょうけども!

『やるしかないんだよ、このままサーヴァントがマシユだけじゃマシユがもたないだろ

う？いつ敵が来るかも分からない、早く召喚してしまおう」

マシユが頷くと急に眩しくなった。どうやら召喚が始まったらしい。

『いいかい？とにかく召喚されたら契約をー』

ビーンツビーンツとなる警報音。何があっただん?!

「どうしたのロマニ！」

『どうやら召喚に問題が生じたらしい！出てくるのが英霊ではない可能性がある！』

「はあ?!どういうことよ?!」

…まるで意味がわからない。マシユが俺の前に来て盾を構える。一体何が出てくるって言うんだ…?!

「…来ますー」

バチバチと音を鳴らしながら辺りがどんどん明るくなる。たまらず目を閉じる。

「…」

「…」

「…」

沈黙もつかの間、目の前には人がーって上半身裸…?

「ええつと…一応人型は召喚されたわね」

「そうですね…」

男だ。体は細いが筋肉質で髪は黒色、いたって普通だ。

「ブロリーです…」

物静かそうな男はそう呟いた。自己紹介されたならおれもしないとな！

「俺は藤丸立香。よろしく！」

握手をしようと手を差し出す。が、ブロリーからは何も返しが無い。

「それ、何の意味があるんだあ…？」

どうやら握手が何の意味があるか分かっていないらしい。

「これは挨拶というか、これから一緒に戦うからよろしくって意味なんだけど…」

「カカロットはどこだあ…？」

カカロット…？聞いたことない単語だ。

『…ブロリーっていう英霊はいない?! どういうことだ?!』

後ろが騒がしいけどどうせ分からないのでブロリーと話を続ける。

「その、カカロットっていうのは人の名前？」

「…俺の殺したいサイヤ人だ…」

サイヤ人…？ますます分からない。しかしこれはチャンスだ。今のうちに契約してしまおう。

「じゃあ取引をしよう」

「?」

「俺たちは各時代に散らばった聖杯、って言うのを集めないといけないんだけど…その世界のどこかにプロリーが探してるカカロットってやつがいるかもしれない」

あくまで推測だけだ。だってサイヤ人の英雄とか知らないしそもそもサイヤ人なんて聞いたことないから…どこかのパラレルワールドから来たのかなって。俺の推測。

「…なるほど、つまり俺がカカロットを殺すのをお前達の手伝う代わりに俺がお前達の抱えてる問題を解決するのに付き合えと?」

まあそう言うことになる。お互いに利益だと思っただけだ。

「…」

考えている。後ろは未だに騒がしいがまあ…ほっておいても大丈夫なはず。プロリーが顔を上げ不敵な笑みを浮かべる。

「いいだろう、ただしカカロットが見つからなかったらお前を血祭りにあげてやる…」
今半分死刑宣告されたよね?! まあ…とりあえず契約できたみたいだし…」

「先輩…危ない!」

マシユの声だ。プロリーの後ろの方からスケルトンが矢を…! 避けきれない…! プロリーも俺も撃ち抜かれてしまう。頭が真っ白になる、何もできないまま俺は目を閉じてしまった。